社会主義者同盟関西地方委員会発行

我が同盟が直面している問題点は何か（続）。

(1) 過渡期世界と世界＝一国暫時革命

Ⓐ 過渡期世界とは、プロレタリア世界革命への過程の入口であり、帝国主義諸国と労働者国家の並存する世界である。それはマルクスがいうところの過渡期社会成立の前段階である。この過渡期世界はソヴィエト年ロシアにおけるプロレタリア革命の勝利をもってはじまった。

過渡期世界という概念は、全世界を獲得するというプロレタリアートの主体的立場において、はじめて明確にされるとともに、何よりも、プロレタリアートが世界的な存在であることを示すものである。われわれは、過渡期世界という概念を明確にすることによって、一国におけるプロレタリア革命の成功が過渡期社会へ（国主義）へと進むことが出来ないことを主張し、一国における過渡期社会への突入が、世界革命と同時にしかありえないことを主張する。したがって、過渡期世界におけるわれわれの使命は、世界＝一国暫時革命というスローガンで、簡命に表現することができる。

この過渡期世界という概念を立てることによってはじめて、われわれはロシア革命以後の革命の敗北を総括しうる。この内容はプロレタリアートの世界観の問題であり、プロレタリア革命に対する考え方であり、マルクス・レーニン主義の真の継承である。

過渡期世界は、帝国主義の終焉であるにもかかわらず、帝国主義は、それ自体で消滅しないがゆえに、過渡期世界の急襲は、この過渡期世界における新たな革命主体の登場によってしかおとずれないのである。労働者国家が生れ、白如貝主義の復興としての勃興をはじめていようとも帝国主義の矛盾は、プロレタリアートに結集し、新たな革命主体を形成してゆくのである。そして、この新たな革命主体の登場によって、過渡期世界は、ひとつの矛盾として出現するのである。

社会主義者同盟関西地方委員会発行

われわれは過渡期世界を一つの過程として、大きく二つに分けて見なければならない。第一期は革命的主体が形成されていない時期であり、第二期はそれが形成された時期である。

この第一期は、さらに、ふたつの時代に区分される。この時代区分を、主観的な事件と年代によって確定することはできないとしても、第一期の最初の時代の特徴は、ヨーロッパ帝国主義が世界を分割し、ヨーロッパ革命が出来なかったことである。ロシア革命は、当時の帝国主義の出来なかったヨーロッパ革命の身代わりであり、それは、比較的短期間に、全ヨーロッパの革命へと引きつがれねばならなかった。

だが、この時代は、いまだヨーロッパ帝国主義の出撃を抑えつつも、その要求は、アメリカ帝国主義が、その有利な地理的条件を利用しつつ、ヨーロッパに代わるべきとしての立場と浮上された時代でもあった。

そして、全ヨーロッパ革命へと引きつがれるべき革命の根拠地ソ連は、周辺的には、ヨーロッパの反動の前に屈服し、一国に於ける労働者国家の建設へとその路線を縮小していった。その結果、ソ連の外交は、ヨーロッパ帝国主義諸国に対するかけしゃいとなり、世界外交によっては力、ソ連一国の防衛をはたしたのであった。

第二期の次の時代は、ヨーロッパに代わり、アメリカが、帝国主義世界の中心になったことである。レーニンの一部帝国主義論は、時代の制約から、このアメリカ帝国主義の発展についてはほとんどふれられていなかった。そして、レーニンの死去とともにスターリン・ブハーリンの全能的な指導下、アメリカ帝国主義を除外した世界ロッパの帝国主義諸国に対するかけの崩壊であった。

トロツキーの登場にもかかわらず、アメリカ帝国主義の分析を放棄した反動的な民族的共産主義の立場に依拠することで、ヨーロッパ諸列強との外交的妥協をはかることを通じたソ連の並進的防衛という路線に終始した。だが、帝国主義の発展により、レーニンの時代よりもはるかに拡大し、ヨーロッパはもはや帝国主義世界の唯一の中心ではなくなっていた。

この拡大した帝国主義世界は、革命と反革命を、世界的に拡大させた。革命と反革命は、ヨーロッパの枠を突き破っていつつあった。

中国革命は、この新たに形成されつつある帝国主義の世界体系のなかでの革命であった。したがって、それは過渡期世界のオ二期を生みだす自然発生的前提となったのである。(ニ)

過渡期世界のオ一期の最後の時代は、過渡期世界の基本的造が確立した時代である。帝国主義世界は、アメリカの重工業、産業部門のあらゆる面における一元的支配的体制が完成された。一方ソ連の一国社会主義建設はアメリカとの共存を前提としたソ連圏の拡大として、すなわち、過渡期世界の構造を推持しつつ、その中での「社会主義」のヘゲモニーの強化としての路線を打ちだした。

一方、「オ三世界」といわれる部分が、世界の階級闘争の中で、大きな比重をしめてきた。「オ三世界」はアメリカをはじめとして帝国主義列強に従属されており、最もひどくふみにじられた世界であった。オ二次世界大戦は、このオ三世界の人民を武装させ、かくて、オ三世界の人民の武装闘争が、反米帝の統一戦線に成長した。

かくして、過渡期世界のオ二期への移行の条件は、全て明らかにされた。われわれは、最後に、オ一期の三つの時代を主体的に総括することによって、問題点を明確にしておこう。

オ一期は、レーニンの革命路線の教条化＝スターリン路線の敗北の歴史であり、そして、このスターリン路線が運なる日和見主義の位置にとどまりえず、革命の圧殺者として、あらわれたことである。そして、このスターリン主義をのりこえた新しい革命主体の登場は、この オ一期においては、実現しえなかった。

このことは、スターリン路線がヨーロッパの帝国主義列強の全般的危機に照応が合わされており、したがって、この時代の帝国主義の新たな拡大＝アメリカ帝国主義の出現がなければ、このスターリン路線は成功したかも知れなかった。逆にいえば、敗場であったヨーロッパからはるか、はなれたアメリカ帝国主義が一九三〇年代の苦難をのりこえ、イギリスに代わる帝国主義世界の盟主に成長し、世界の反革命の拠点となったことが、スターリン路線を敗北させたのであった。

それゆえ、スターリン路線をのりこえた新たな革命主体の登場は、この世界の反革命の拠点としてのアメリカの帝国主義に対する斗争の中から形成されざるを得ないのである。そして、この新しい革命主体が、一国の政治潮流として登場するためには、アメリカの世界支配が完成し、成熟し、この アメリカの世界支配それ自体がはみ出す矛盾の拡大が前提にならねばならなかったのである。

一方、スターリン路線は、この成長しつつあったアメリカ帝国主義打倒の戦略をもちえず、むしろそれとの協定や並存を前提としていた。このスターリン路線は、新たな革命主体の登場を独断に粉砕しつつ、アメリカの世界支配に対する斗いの抑圧者として、出現している。かくて、ソ連「社会主義」も、自らを世界革命の抑圧者として登場させている。

(三)過渡期世界における革命主体の登場

オ二期の特ちょうはアメリカの帝国主義世界支配の完成の中で、その矛盾の中から、新たな革命主体が形成され、そしてその革命主体の斗争によって、世界の支配構造が変革されつゝあるそのような時代である。だから、何よりもまず、新たな革命主体の形成過程を明らかにしなければならない。

植民地諸国はイギリスが帝国主義の頭目であった時代から、徹底した収奪にあっていた。だが、当時の植民地諸国の文化水準は帝国主義の暴ぎゃくに対して、なすすべを知らなかった。だが、二度にわたる世界戦争は、植民地諸国を目ざめさせ、植民地諸国の人民に武器を与えた。

一方、この帝国主義世界戦争は、アメリカ帝国主義を除く帝国主義列強を破産させ、帝国主義の世界支配を危機におとしいれた。オ二次大戦後の民族独立の運動は、アメリカを除く帝国主義列強の破産と植民地諸国の武装という条件の中で、嵐のごとく進んだ。このような民族独立の運動の最先端には中国革命があった。

だが、この民族独立運動は、たちまちにかべにつきあたった。帝国主義の不均等発展の法則は、後進国における民族国家＝民族経済の形成を許さなかった。民族独立運動が民族解放＝社会主義の運動にとって代り、民族解放斗争が、プロレタリアートの世界性を自覚させ全世界に新たな革命主体を形成させたのである。これは帝国主義の不均等発展の法則の貫徹形態を解明することによって明らかにされる。

今日の帝国主義の運動法則の解明は、まず、独占資本の内実に焦点があてられねばならない。すなわち、独占資本の実体が、高度の科学技術水準を前提とした機械体系として存在しており、後進国の経済の中には存立しえないことである。

アメリカ帝国主義の世界支配は、後進国に援助（日帝投資）を与え、それでもって、自国の商品を購入させ、そして、独占企業はその後進国から得た資金を先に述べた。その実体から後進国に投資せず、先進国に投資するという構造で行なわれている。だから、後進国にとってのアメリカの援助は、自国の工業化には役たたない。

さらに、アメリカは、工業国でありながらまたオー級の農業国である。アメリカの大穀倉農業は、後進国の農業生産物の価格を下げ、後進国は唯一の農業生産において危機に立つのである。こうした世界支配の構造は後進国における民族資本すら形成させず、たとえばラテンアメリカに見られる如く、一国の多様、特に工業部門をそっくりアメリカ独占資本に奪われてしまうのである。この様に後進国は後進国として再生産され、民族解放戦争の条件はますますつみかさねられている。

こうして、後進国の民族解放戦争は長期にわたって継続するのであるが、軍事は戦争の中で好転を迎えた。それは第三次大戦の様へイから立ちなおりつつあったことであり、拡大した対ヨーロッパ貿易と軍事生産が日帝経済を刺激したのであった。「大砲とバター」「ゆたかな社会」がこの時代のアメリカのスローガンであった。

ただ一九六〇年代に入ると新植民地主義政策は停滞するとともに、アメリカの政治は相対的に低下し、アメリカの経済力は低下していった。それは日本体制の中でのドルの力の低下としてあらわれ、ドル危機などとされた。この二つはアメリカの世界支配政策の転換を意味した。アメリカ帝国主義はベトナム侵略によって危機に陥ったのであり、それは従来の世界支配に代る新たな政治的支配をアメリカと同盟国にもたらした。

日帝経済力の面で急成長をとげたアメリカは、その経済的力と共に日帝は独自路線にのりだし、外国企業の乗っとり＝世界企業の建設という第二段階を打ちだしたのであった。だが、この段階はアメリカ帝国主義の没落傾向を

〈しゅう〉 過渡期世界の危機と階級闘争の前景

過渡期世界の危機は新たな革命主体の登場によってしかおさまらないこと。そしてこの新しい革命主体は新植民地主義を焼きつくした後進国の革命戦争の中から全世界的に新しい力をもって登場したこと。これらのことは既に明らかにされた。問題はこの新たに形成されつつある革命主体の質であり、それは第三世界革命的であり、反米帝の戦略しかもちえていない。この新しい革命主体の限界、その自然発生性はいま世界の階級闘争の停滞局面をむかえようとしている。

この新しい革命主体を過渡期世界の革命、世界＝一国間矛盾革命の様の下に第二の世界史に結集すること、このことからはじめてこのゆきすぎは打破できない。戦争が日常的に存在している国々においては、この停滞はケンキョに現われているわけではない。ただアメリカを除く先進国の資本主義においては、この問題は顕著である。このことは後進国の革命戦争をつくりだした世界史人の自然発生性が、その限界故に先進国の階級闘争を領導しえるのであり、このことは逆に先進国の右翼的な世界史人の自然発生性に大衝撃を与え、世界革命論の任務をはたさねばならないことを直視している。〈しゅう〉

現在、先進国の革命党に与えられているこの任務＝世界党建設、はこの過渡期世界の危機の形態によって規定されている。

第一に、今日の世界階級闘争のゆきづまりは、帝国主義列強内の反革命同盟と、米ソの対中国包囲作戦とによってもたらされたものである。このことは、60年代に入って展開された世界の階級闘争が、過渡期世界の革命＝世界一同時革命への自然発生性を内包しているが故に、帝国主義の反革命同盟の強化（NATO、安保）と共に、米ソの対中国包囲が進むのである。

第二に、先進国においては、過渡期世界といえども、自国帝国主義の打倒を通して、世界革命への道を切り開かねばならない、ことである。后進国の革命戦争が、米帝と米軍及びかいらい政権に対する民族的闘争であったのにくらべ、先進国の場合は、労働者階級の階級性が闘争の基軸にならねばならないことである。先進国の階級闘争がベトナム反戦闘争の中で新しい局面をたたらしながらも、それが一たんは低潮を余儀なくされるのは、先進国においてはこの階級形成の内容が、媒介にされねばならないからである。

第三に、先進国においては、社民になり、共産党リーダーリン主義党が強固な相をはっている。スターリン主義党は、一部先進国、米、独を除いては合法化されており過渡期世界の体制を支える役割をはたしている。したがって、反帝闘争を主軸におきつつも、その闘争のなかで、スターリン主義党は　その闘争の裏切者として立ちあらわれるのであり、このスターリン主義党との党派闘争が要求される。このことは、過渡期世界における労働者国家の存在すべき役割とその役割をはたすべき指導の内実がとわれていることを示している。

われわれはこの三点を主要な内容としたところの、世界党建設の任務に直面しているのであるが、この任務を解決してゆくためには、最近の帝国主義の運動法則を分析しなければならない。だともと、アメリカ帝国主義の世界支配が、后進国の資本化を生み出し、民族解放戦争、土地革命をつくりあげ、そして、帝国主義の不均等発展が帝国主義列強の復活と国際支配力の強化としてあらわれてつつ、アメリカのそう対的地位の低下、ドル危機といった一連の事態を生み出し、民族解放闘争は、この事態をさらに促進させ、ついに、先進国に対する軍事的勝利を奪る政権を迎えたのであった。

だが帝国主義は、はじめて、自動ボーカイしないのであり、アメリカはこの自らの危機を延命で、再生産し始めた。それは、外国企業ののっとりや子会社の創立といった世界企業と外国への銀行の創立である。この アメリカ帝国主義の新たな資本輸出の形態は、どのような事態をもたらしたであろうか。何よりも、それは、ドル危機に対する米帝の防衛なのである。二円体制におけるドル危機は、米帝の基軸的地位の低下を生みだしている。だが米帝は、世界企業と銀行の世界的輸出によって、先進国内部にのりくいこみ、一方后進国の資本蓄積をあさめ、そのことによって、米帝の基軸的地位の低下をふせごうとしているのである。このことは米帝が、后進国のみならず、先進国に対しても寄性せざるを得ない　のような事態を迎えていることを物語っている。世界企業と銀行による圧力を基盤とした反革命同盟は、しかしながら米帝の直面している解決策とはならず、ますます自らを泥沼におとしいれている。

何故なら、まず、米帝の国内経済は、ますます、企業収益率を低下させることであり、そして、かつての資本が利子生み資本の形態で植民地に寄生し、そのことによって、利潤生産者を生みだしたが、米帝は利子生み資本の形態で、世界から資本をくちくしたのであり、この利潤生み資本は、利潤生産者の民を形成しないことである。米帝は自らの経済力によってではなく、他国に寄生した経済力によってしか自らの収奪をたもてないのであり、それは国家権力の強化と、国家による産業の上からの再編によってしか支配の引きのばしをすることができない。

第二国の帝国主義列強のたじの

アーム

切に、米帝を除く帝国主義列強はこのような米帝の支配相互のなかでも、なおかつ強力に成長しつつある日独と、一方、広範している英仏などの諸国とに二分化されている。攻撃帝国主義の危機は、一度、フランス五月革命のごとく、労働者大衆と斗争にたち上らせる。こと全体じて危機の要因を発展させるが、こうした解決はますますその国際的地位を低下させるものでしかない。また、日独がかかえている矛盾は、米帝のそれと同一である。米帝の世界支配相互のなかでの国内の市場圏の形成は、その国際的国内経済にはねかえらざるを得ず、国家権力の強化と戦争の上からの再編が目的化するのである。

こうして、帝国主義列強においては、ソビエト運動発生の自然発生的根拠がある。そして、われわれは、革命党のもとにソビエト運動を組織することによって、先進国における労働者階級の階級形成を促進することが出来るのである。

このように、過渡期世界における世界構造にむけて二つの自然発生性が存在している。その一つは、世界的規模での階級形成ともいうべき、革命戦争であり、それが形成しつつある世界革命戦争である。もう一つは、先進国におけるソビエト運動であり、それは、労働者国家における階級形成ともいうべき内容である。この両者を統合する意義性が、いま要請されている。

(VI) 世界・一国同時革命にむけた世界革命戦争の戦略と戦術

過渡期世界の革命は、世界一国同時革命として、すなわち世界革命戦争である。これは、米帝の世界支配に対する大陸革命として提起されたが、大陸革命は米帝の世界戦略の再編と、帝国主義列強間の競争の激化のなかで、世界革命戦争としてとらえなおされねばならない。

この世界革命戦争は、今日いかなる発展段階にあり、そして、今後はどのように展開されてゆくのか、このことが明らかにされねばならない。ベトナムの民族解放戦争は、米帝の一元的世界支配に対し生みだした、被抑圧国の民族解放闘争と、帝国主義列強の不均等発展のなかで斗われ、米帝は敗北した。この米帝の世界支配に対する戦争は、世界革命戦争を生み出し、世界党建設をつくりだした。すなわち、帝国主義列強内部に革命戦争の前線基地をつくりだしたのである。

ただ、民族解放戦争の発展線上に先進国の革命戦争を想起することは出来ない。先進国の革命戦争は、ソビエト運動と結合されてはじめて、持続した戦斗に転化してゆくことが出来る。

ところで、いま、われわれにとって問題になっているのは、この世界革命戦争の前線基地の最初の戦斗である。この戦斗のもつ意味は、世界党の建設という今日の戦略的課題を実現するための必要不可欠の戦術である。それと共に、この前線基地の戦斗は、世界革命戦争の各戦線をふるいたたせ、革命戦争の前進を生みだす。そして、この革命戦争の前進は過渡期世界の帝国主義の支配相互から直ちに、帝国主義列強の戦線に波及し、ソビエト運動の条件をさらに拡大するであろう。

附記　何々の点について不十分な点があるので討論のなかで明確化し、再度書きあらためることにしたいと思います。

(文責　榎原)